

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：32617

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2013～2016

課題番号：25380696

研究課題名（和文）ローカルニュースの現状と役割に関する研究：内容分析と送り手調査から

研究課題名（英文）A Study into the Current Situation and Role of Local News: Content Analysis and a Survey of the Broadcasters

研究代表者

深澤 弘樹 (Fukasawa, Hiroki)

駒澤大学・文学部・准教授

研究者番号：70584499

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、地方局とローカルニュースを研究対象とし、地域ジャーナリズムの意義を探究したものである。本研究では、全国の28局対象のアンケート調査、6局のニュース映像の内容分析、10局の報道責任者・ニュースキャスター計31人の聞き取り調査を行った。それにより、ローカルニュースの現況と報道の担い手の意識を分析し、ローカルニュースの全体的傾向や局ごとの特徴、住民本位を重視する報道姿勢、重要性を増すキャスターの役割が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The study explores the significance of community journalism using local broadcasting stations and local news as its research subjects. A questionnaire survey with 28 news broadcasting stations, content analysis of news programs by six stations and interviews with a total of 31 news editors and newscasters from 10 stations were carried out. The data was analyzed to identify the current situation of local news and the perception of the broadcasters, and the analysis has identified the general tendency in local news and each station's characteristics, the resident-centered approach to broadcasting and the increasing importance of newscasters.

研究分野：マス・コミュニケーション論

キーワード：地域ジャーナリズム 中立公平 客観性 公正 ケアのジャーナリズム ニュースキャスター キャスターコメント キャスタートーク

1. 研究開始当初の背景

本研究は、弱者に手を差し伸べる「ケアのジャーナリズム」の考え方を手掛かりに、地域ジャーナリズムの役割を探ることを目的としている。

東日本大震災では、コミュニティ放送局や地域紙の果たした役割がクローズアップされ、地域メディアが心がけている地域に根差した報道や人々の暮らしを守る営みが再評価されることになった。

林香里は「ケア」の観点からジャーナリズムを捉えなおす必要性を強調している。この考え方では、従来の「客観性」「公平性」を問う権力監視のジャーナリズムの役割に加えて、「主観的」であり視聴者との「親密さ」「共感」の構築に重きが置かれ、受け手に寄り添う送り手側の姿勢が求められている(林, 2011)。こうした視点が最も必要なのは地域メディアであり、地域報道の重要性が高まっている。

そこで、本研究では、ローカルニュースの傾向について、アンケート調査とニュースの内容分析によって明らかにすると同時に、報道担当者やキャスターの聞き取り調査を通じて、地域報道のあるべき姿やキャスターの理想像を明らかにし、それにより、地域ジャーナリズムの意義を探ろうと考えた。

研究代表者は2010年3月まで山梨放送に18年間勤務し、アナウンサーとして日々の報道活動に携わってきた。2004年4月から5年間はニュースキャスターを経験し、報道の最前線で視聴者と向き合った。そして、実務での経験をメディア理論と結びつけることを目的に、会社での業務と並行してニュース分析に取り組み、博士論文を執筆した。

この研究が焦点化したのは、娯楽化が進行するテレビニュースであり、送り手であるキャスターの意識であった。娯楽化とは、内容面においてスポーツや季節の話題(ソフトニュース)が増加することや、演出面でのCG・BGMの多用などを指す。視聴者にとって「とつきやすく」「わかりやすい」ニュースを志向するもので1980年代以降の傾向とされる。

こうした傾向はテレビ朝日の『ニュースステーション』登場後に顕著になって、各局がこぞってニュース番組をワイド化し、「ニュース戦争」が引き起こされることになった。さらに、ニュースの変容はニュースの伝え手であるニュースキャスターのありようも変化させた。

『ニュースステーション』では久米宏キャスターの軽妙洒落なトークが人気となり、原稿を正確に読むアナウンサーとしての役割に加えて、個性を前面に出して意見や感想を述べることも要求されるようになった。

昨今のニュースでは、複数のキャスターに加えてコメンテーターがスタジオ内に横一列に並びトークを繰り広げる姿が見られる。こうしたトークは視聴者にとっての解釈枠

組み(フレーム)を提示することになり、出来事理解のモデルとなりやすいことが指摘されている(村松, 2005)。

先に述べた研究代表者の調査においては、テレビニュースの内容分析を行い、キー局のニュースの娯楽化の進行度合いとキャスターコメント(ニュース後の感想や意見等)がいかに現在のニュース番組において重要な位置を占めているのかを明らかにした。

また、キャスターの聞き取り調査において、彼/彼女らが常に視聴者視線を心がけ、受け手との意識の共有を目指そうとする姿勢が明らかになっている。キャスターは自身の喜怒哀楽をコントロールし、番組内での言動を調整することで、視聴者と親密な関係を築こうとしていた(深澤, 2015)。

今回の研究では、こうした研究を踏まえ、視聴者とより近い関係にあるローカル局のニュースについても、娯楽化の進行度や送り手の意識をより詳細に分析したいと思うに至った。地域メディアは視聴者の顔が見えるところで活動しており、常に地域や地域住民側に立った報道が求められる。前述の「ケアのジャーナリズム」に関していうと、地域メディアは地域住民との「つながり」を打ちたて、送り手と受け手との循環的で親密な関係を構築することが求められているのであり、その観点からも、地域報道に携わる担当者の意識を聞き取り調査によって明らかにしたいと考えた。

ネット社会の進展で、テレビメディアの相対的地位が低下するなか、財政基盤の弱いローカル局は経営的に厳しい状況にある。しかしながら、各局にとって報道部門は削減できない分野であり、その局の存在意義を問われるほどの重要性を持っている。こうした位置づけにあるローカルニュースのありようを明らかにすることは地域ジャーナリズムを考える上で意義がある。

これまで、地域メディアの重要性は指摘されてきたものの、個別のイシューに対してではなく包括的に研究した研究は多いとはいえない。さらには、従来のニュース研究においては、放送されたニュースについての分析の知見は積み上げられているものの、送り手の意識に踏み込んだ分析は限られているのが現状である。

また、ローカルニュースの娯楽化を詳細に分析したものは見られない。経済的余裕のないローカル局は技術面でハンディがあり、キー局ほどの派手な演出は少ないと予想される。そうしたなかで、見た目の華やかさを求めるのではなく、ローカル局が地域の課題にどう取り組み、いかに伝えているのかを探ることは報道番組の本義を問うことにもなる。

さらに、キャスターの「語り」がニュース番組においていかに重要であるかを検討することも本研究の狙いであり、局の「顔」として、住民を公的争点へと引き込むキャスターの役割にも迫ることができると考えた。視

聴者との親密な関係に基づく公共への架橋が放送局の重要な役割であり、本研究により、地域ジャーナリズムの理念や可能性を問うことにもつながる。

以上のような背景と問題関心のもとで本研究はスタートしている。

2. 研究の目的

本研究は以下の3つの研究からなる。地方局を対象としたアンケート調査、ローカルニュース映像の内容分析、報道担当者（責任者、ニュースキャスター）の聞き取り調査である。以下、それぞれの目的をまとめる。

(1) アンケート調査の目的

本アンケート調査は、地方局の報道体制や放送しているニュースの概要、方針などの基礎資料を得ることが目的である。

アンケートは全40問で構成されており、報道体制、ローカルニュースの構成、地域報道のあり方、ニュースの出演者、スタジオセットのコンセプト、インターネットの活用、ニュース素材の保存・活用、ローカルニュースのあり方、以上の8つのテーマで聞いた。

本調査によって、現在のニュース番組の構成や項目数などの基本フォーマット、ニュースに携わる人員など、ローカルニュースを取り巻く現状や番組の全体的な傾向を明らかにする。さらには、インターネットへの対応やアーカイブ化の進展など、地域の資源としてニュースがいかに活用されているのか、今後のニュースの可能性や予想される展開を調査することを目的とした。

(2) ニュース映像の内容分析の目的

本内容分析は、放送局から提供された映像または収集した映像を分析し、ローカルニュースの現在の特徴を明らかにすることを目的とする。

具体的には、まずニュース番組の構成の特徴を明らかにする。それぞれのニュース項目をジャンル分けしたうえで、ハードニュースとソフトニュースの項目数と所要時間を算出し、現在のローカルニュースの特徴を探る。

二つ目は、キャスターの「語りかた」を明らかにする。「語りかけ」がどれだけの頻度で出現するのか、どのジャンルにおいてか、また、放送局の見解が示されるニュース後のコメントの頻度と内容を明らかにし、キャスターコメントの類型化を試みる。なお、本研究では、キャスターの意見・感想の表明やキャスター間のトークを総称して「語りかけ」と呼び、研究を行っている。

(3) 送り手の聞き取り調査の目的

聞き取り調査では、地方局の報道担当者が地域ジャーナリズムの重要性をどのように認識し、視聴者・地域とどう向き合い、実際

の報道活動に当たっているのかを聞き、地域報道のあるべき姿を探ることを目的とした。

さらには、視聴者と公的事象とをつなぐ役割を担うキャスターにも注目し、あるべきキャスター像を探ることも目的である。また、インターネットが力をもつなかで、テレビニュースにできることは何か、ローカル局の可能性を探ることも本調査の目的であった。

具体的には、地域報道のあり方について、ローカルニュースのあり方について、キャスターのあるべき姿、これからの地方局・ニュースについて、以上を聞いた。

3. 研究の方法

本研究で行った3つの方法について以下にまとめる。

(1) アンケート調査

アンケートについては、全国の地方局のうち、地域バランスなどを考慮して60局程度を抽出して事前に電話して接触を試みた。このうち、調査協力の承諾を得た54局に調査票を郵送で送付して回答をお願いした（一部メールでの送信、2013年11月～12月）。回収できたのは28社（回収率51.9%）である。

28社の地域別内訳は、北海道・東北地区が7社、中部地区が11社、中国・四国地区が6社、九州・沖縄地区が4社であった。また、系列別では、JNNが5社、NNNが18社、FNNが3社、ANNが3社であった（クロスネット局があるため合計では29社となる）。

各社からの回答内容については、統計解析ソフトSPSSを用いて分析した。

(2) ニュース映像の内容分析

全国の地方局で放送されているローカルニュースのうち、映像提供に同意した局と研究代表者自らが収集した計6局のニュース映像の分析を行った。分析対象は2014年9月（1日・月曜～26日・金曜日）に放送された20日分のニュース映像である。9月の映像を選択した理由は、選挙や五輪などの国内外の重要なトピックがある場合はニュース内容に偏りが生じるため、より日常のニュース形態を確認できるこの月に設定した。

方法としては、放送されたニュースを項目ごとに区切り、カテゴリー（政治、経済などのハードニュース/話題やスポーツなどのソフトニュース）ごとに分類を行い、ローカルニュースの構成の特徴（項目数や所要時間、全体に占める割合）を明らかにした。また、キャスタートークやコメントについても、ニュース項目ごとにその有無を確認し、その内容（感想や意見、情報付加）の傾向を明らかにした。

(3) 送り手の聞き取り調査

放送局に出向いての聞き取り調査は平成27年度から28年度にかけて行った。対象となったのは10社であり、11人の報道統括者

(局長・部長クラス、1人の記者を含む) 20人のキャスター、計31人に調査を試みた。

調査は1対1の面接方式であり、事前に作成して送付した質問項目に基づいて進め、必要に応じて質問を加える半構造化インタビューの形式を採用した。一人1時間程度行った。

調査後には、インタビューを書き起こしたトランスクリプトを作成して調査対象者に送付し、内容を確認してもらったうえで、必要であれば加筆、修正、削除し、許可を得た部分のデータを用いて論文に掲載した。

4. 研究成果

(1) アンケート調査

本アンケートでは、前述のとおり8つのテーマを設定して28局から回答を得た。分析結果のうち、報道内容やニュースキャスター、ネット対応に関係する部分について以下にまとめる。

報道体制

報道番組を制作する各局の体制を聞いたところ、最大で134人、最小で14人、平均で36.1人であった。このうち、記者の平均人数は13.3人で、それほど多いとはいえない。男女別では、男性が平均11.1人であるのに対し、女性が2.3人と、極端な男性社会であることが明らかになった。

ローカルニュースの構成

通常、東京キー局のニュースが18時15分まで放送され、その後のローカル枠を用いてニュースが放送されている。昨今は、夕方の生ワイド番組と一体化させたり、2部制を採用する局も多くなっている。本アンケートにおいて、ワイド形態や2部制を採用している局は28局中10局であった。

また、CMを除いたニュースの正味の時間は平均で30分49秒であり、地方局では約30分間のニュースの放送時間が確保されていることが明らかになった。

毎日のニュースで放送している項目数は、最も多いのが「11~14項目」で12社(44.4%)であり、「20項目以上」はわずかに2社(7.4%)、「6~9項目」は4社(14.8%)であった。

地域報道のあり方

地域報道で重視すべき点について、16項目を設定し、5段階(5が最も重視)で評価してもらったところ、最も重視されていたのが、「客観性」(平均で4.54)であった。その後、「地域の問題の掘り起こし」と「権力監視」が4.50で並び、「中立であること」が4.36、「弱者・少数者の視点」が4.18で続いている。

これらの結果からは、ジャーナリズムで重視される権力監視や客観性などに加えて、住民に寄り添う地域メディアの姿勢や、当事者ジャーナリズムを志向していることが鮮明になった。

ニュースキャスターの構成と求められるもの

各局にニュースの出演者について聞くと、出演者の数は最大が7人で、最小が2人であった。平均は2.75人であり、キー局にみられるような大人数の出演者というよりは、ローカルニュースにおいては男女一組で伝える形式が一般的であることがうかがえる。

年齢は男性の平均が42.6歳、女性が30歳と男女で12歳以上の開きがあった。この結果については、男性は入社20年程度でベテランアナウンサーがメインキャスターを務め、女性は入社8年程度で一通りの業務をこなした後にキャスターに就いていることを示唆している。

また、キャスターに求められる資質については、「アナウンスの基本技術」に加えて、「バランス感覚」や「幅広い教養」が重視されていた。さらには、視聴者に与える印象として、「安定感」「安心感」「親しみやすさ」が求められ、ローカルニュースのキャスターについては、権力を監視する役割よりも、視聴者にとって身近で信頼される存在が重視されていることが明らかになった。男女とも同様の傾向であるが、女性は男性よりも「やさしさ」や「生活感」などが重視されていた。

インターネットへの対応とローカルニュースのこれから

地方局においてもインターネット社会にどう対応するかは重要な課題となっている。調査時点では、インターネットを利用してニュース映像を配信している局は28局中22局であった。1日平均では5.44項目のニュースを配信していた。

また、ソーシャルメディアとの連携では、「行っている」が12社(42.9%)、「行っていない」が15社(53.6%)と行っていない社が半数以上を占めた。ネット利用のメリットやデメリットを見極めているところもあり、人手不足やセキュリティへの懸念などから導入に踏み切れない会社もあった。

今後のニュースの方向性について聞いた設問では、ローカル性にこだわり、市民と直接向き合う姿勢が大切であるとの回答が目立った。

(2) ニュース映像の内容分析

6局で放送されたローカルニュースの内容分析によって以下が明らかになった。

ニュース放送時間と番組構成

前述のとおり、ローカルニュースは午後6時15分から午後7時前までの放送枠で流されることが多い。今回、内容分析を行った6局のうち4局がそうであり、2局は45分間の前半と後半をローカル枠として、間にキー局の挟み込む形式になっていた。

CMや提供クレジット等を除いた1日平均の放送時間は最短で20分06秒、最長で28分03秒と約8分間の開きがあった。

ニュースの項目数は、1日平均が最も少ない局で9.7、多い局が13.7項目であった。

ハード/ソフトニュースの割合

続いて、ニュースをジャンル分けし、ハードニュースとソフトニュースの割合を出した。

項目数でみていくと、最もハードニュースの占める割合が大きい局が全 273 項目中 143 項目で、割合は 52.4%と半分以上を占めている。一方で、最も割合が小さい局は 194 項目中 73 項目と 37.4%がハードニュースであった。この局を含め、ハードニュースが 5 割を下回る局が 6 局中 5 局となり、一般化はできないものの、ローカルニュースではソフトニュースの項目が多くなっている傾向がうかがえる。

また、ハード/ソフトニュース別の放送時間ではさらにソフトニュース重視の傾向がみてとれる。ハードニュースの時間でみると 40%未満が 2 局、40%台が 3 局という結果になった。唯一、時間にしてハードニュースの割合が 5 割を超えたのは、項目でも 5 割を超えていた 1 局のみで 52.7%であった。

さらに細かくジャンルをみていくと、ハードニュースでは事件や事故、火事などを示す「社会」が最も割合が大きい(1 局を除く)。ソフトニュースでは、季節の話題や人物紹介、行事などを示す「話題」が多く、2 局では項目に占める割合が 70%を超えていた。

キャスターの「語りかけ」の特徴

キャスターの「語りかけ」については、頻繁に用いられている局とストレートニュース中心の局に分かれる傾向があった。全体の項目数に占める「語りかけ」が確認された項目の割合は、最も小さい局で 7.4%であったが、なかには、50.2%とニュースの全項目のうち半数以上で「語りかけ」が確認できた局もあった。「語りかけ」が確認された項目の全項目に対する割合を大きい方から並べると、50.2、39.3、16.8、13.2、8.2、7.4%となる。こうした差異は、局のニュースに対する考え方の違いからくるものと推察される。

「語りかけ」項目のハード/ソフトニュース別では、6 局中 5 局でソフトニュースが占める割合が大きかった。前述の「語りかけ」が最も多く確認された局では、ソフトニュース 130 項目のうち 90 項目(69.2%)で語りかけが行われていた。

「語りかけ」の形態別の特徴も分析した。本研究では、スタジオ内でのキャスター間の直接的なコミュニケーションを A タイプ、スタジオ外の中継先とのやりとりを B タイプ、視聴者に向かっての直接的な語りかけを C タイプとした。また、それぞれのタイプがどの位置で現れるのかについて、VTR が流れる前のリード部分を「前」、VTR や中継先との会話などのニュース本編で確認できる場合を「中」、VTR 後のキャスターの感想・意見、キャスタートークを「受け」として、その出現箇所を調べた。

その結果、「語りかけ」を最も多用している局で最も頻繁に用いられているのが A タイプ、つまり、キャスター間の会話であった。

「語りかけ」が確認された項目が 119 項目あり、そのうちの 118 項目が A タイプだった。特にソフトニュースで多く確認され、「受け」で多くみられる。これは、地域の話題などに対して VTR 後にキャスターが感想を言い合う場面が多いことを示している。

また、次に語りかけが多い局(39.3%)でも A タイプが最も多い。ただし、「受け」よりも「中」、つまり VTR 中に会話しながら伝える形式が多くなっていた。このほか、「語りかけ」の頻度が高くない局では、A タイプよりもキャスターが視聴者に語りかける C タイプが多い局もあり、トークよりも、キャスターがカメラ目線で必要なことをしっかり伝えることに重きを置いていた。

キャスターが「語りかける」内容

キャスターが語る内容の特徴を明らかにするために、「語りかけ」の形態のうち、「受け」のコメントの類型化を試みた。カテゴリーは「解説」「情報付加」「感想」「エール」「意見・問題提起」「注意喚起」である。

その結果、「情報付加」「感想」が多く、「意見・問題提起」は確認できた局が 6 局中 2 局であった。「受け」が 91 項目で確認できた局を例にとると、そのうちハードニュースが 22 項目、ソフトニュースが 69 項目でソフトニュースの方が多くなった。このうち、ソフトニュースでは、「感想」が 49、「情報付加」が 33 項目(両方の要素がある場合は両方でカウント)と多くなっていた。ハードニュースでは、「感想」「情報付加」がそれぞれ 9 項目に対して、「意見・問題提起」は 8 項目であった。

以上の結果から、ローカルニュースにおいては、政治的なトピックにおいてコメントする例は少なく、局としての主義主張の表明を避ける傾向があることがわかった。

(3) 報道責任者・ニュースキャスターの聞き取り調査

聞き取り調査の質問項目は多岐にわたったが、客観性や中立性、公平性を報道の現場がどうとらえているのかを中心に考察した。以下、その内容をまとめる。

客観性・中立公平をどう考えるか

中立性や公平性などの理念については、放送法に規定があり、当然のことながら、報道の現場においても守るべき規範として理解されている。ただし、実際に何をもちて「中立・公平」「客観」として報道するかはそれぞれの局の判断に任されているため、各局がいかにとらえているのかを聞いた。

その結果、多くの放送局では、「中立・公平」について、両論を併記したり、多様な意見を取り上げてバランスを取ることを心がけており、視聴者にとって判断の基準となる情報を伝えることを重視していた。その根底には、判断は視聴者がすべきものであって放送局側が提示すべきものではないとする考

え方がある。ここでは放送局が持っているフォーラムとしての役割が重視されている。

このほか、地域の掘り起こしを重視しているという回答もあり、中立に伝えるのみならず、時には、地方局が主体的に「何が問題か」を提示することも必要だと考えていることがうかがえた。

理念としての「客観」と住民本位の報道では、何をもち「客観」的な報道といえるのであろうか。

聞き取り調査では、「客観を目指す、主観を排除するのは不可能」とする回答が目立った。ただし、「括弧つきの客観なんでしょうね」とあるキャスターが言うように、客観報道の理念自体は目指すべきものと理解していた。

また、中立性の理解として、どの取材先からも等距離を意味するのではなく、時には力の弱い市民側に立っていいのではないかとする意見もあった。この場合、市民側に寄ることになり「中立」ではない。しかし、ローカル局の報道は住民本位であるべきで、その代弁者たるべしとする考え方である。それは、社会正義の実現を目指すもので、「公正」な報道につながっていくものと考えられる。

寄り添うジャーナリズムの有効性

本研究の中心となっている考え方に「寄り添うジャーナリズム」がある。聞き取り調査では、どの局の担当者・キャスターもこの姿勢の大切さは理解していた。では、具体的にいかなる報道姿勢と考えられるのであろうか。共通しているのは「地域住民に寄与する」地方局の役割であり、視聴者と同じ地域に住む生活者であるという自覚である。

とりわけ、東日本大震災を経験した被災地では実感を持って受け止めていた。被災地での取材を経験した記者は「東京にあるものをこちらに持ってこさせる。報道の役割はこれだと思いました」と述べている。ここからは、積極的に住民に手を差し伸べることも必要だと感じていることが調査から明らかになった。

ニュースキャスターの役割

画面を通して視聴者と向き合うキャスターのあり方を通して、寄り添うジャーナリズムについて考察した。

報道責任者の調査からはキャスターが「局の顔」として重要な役割を担っていることが明らかになった。キャスターの理想像として、視聴者に近い存在を求めている、従来、ジャーナリストに求められる権力に切り込んでいくという存在よりも、むしろ視聴者に近い存在で視聴者と同じ感覚を持ち、共感してもらえる存在であることを重視していた。キャスター自身もこの考え方を内面化していた。

世論を二分するトピックの伝え方

地方局にとって判断が難しいのが、原発や国防などの意見が分かれる問題についてのスタンスである。

中立・客観性とも関係してくるが、局とし

て意見を前面に出そうとする局はなかった。ただし、前述のとおり、地方局は常に地域住民に寄り添う存在であることから、その代弁者として住民の声を伝える役割を重視していた。

しかしながら、地域住民は一枚岩ではなく、放送局の軸足をどこに置くかという問題に直面することにもなる。視聴者との距離が近いがゆえのジレンマを抱えていることが聞き取り調査から明らかになった。

以上、本研究は3つの調査から、現在のローカルニュースのありようと報道担当者の意識を明らかにした。研究を通して、送り手は住民に寄り添う意識を内面化して報道活動にあたっていることやキャスターの重要性が明らかになった。さらに、局によって構成やキャスターの語る頻度には差異があり、多様な形態であることもわかった。

本研究では、報道内容の深い分析や地域にもたらず機能などを明らかにできなかったが、命綱ともいえる地域情報を住民に届ける地方局の重要性、地域ジャーナリズムの意義はさらに増すと考える。引き続き注視していきたい。

<引用文献>

- 深澤弘樹、『変容するテレビニュースとキャスターの役割』、2015、春風社。
林香里、『<オンナ・コドモの>ジャーナリズム：ケアの倫理とともに』、2011、岩波書店。
村松賢一、『ニュース番組における『おしゃべり』』、三宅和子・岡本能里子・佐藤彰編『メディアとことば2』、2005、ひつじ書房、2-28。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

- 深澤弘樹、『地域ジャーナリズムにおける客観・中立公平・公正とは：ローカル局インタビュー調査から』、『駒澤社会学研究』第49号、2017、29-57。
深澤弘樹、『ニュースキャスター交代を考える：すぐ叩かれ、語ることが難しい時代こそ 時代におもねらず本質見極める言葉を』、『Journalism』通巻312号、2016、79-86。
深澤弘樹、『内容分析からみるローカルニュースの現状』、『駒澤社会学研究』第48号、2016、123-149。
深澤弘樹、『ローカルニュースの『現在』：全国地方局アンケートから』第47号、2015、141-168。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

深澤 弘樹 (FUKASAWA, Hiroki)
駒澤大学・文学部・准教授
研究者番号：70584499